

追悼・渡辺保男学長

渡辺学長8年間の苦闘

大 口 邦 雄

政治学行政学には門外漢の私には、渡辺保男教授の学問上の業績について云々する資格はない。ただ私は、氏が学長を務められた期間の大部分、懇請を受けて学務副学長を務めた。比較的身近にあって大学行政に携わった経験から、幾ばくかの献辞を捧げたいと思うのみである。

行政者としての業績を評価することは容易ではない。行政は雨漏りを直す職人の仕事のようなものである。雨が漏れば人は不平を言うが、雨が漏らなくなれば、直した職人の労苦を思い出す人などありはしない。渡辺学長はよくこのことを自嘲気味に、「どぶさらえ」と言っておられた。

ICUは戦後米国の大学をモデルとして始まった。草創期、有力な教授たちがいわば手勢を率いて、他大学ではできないようなことをどしどしと自由にやった。日本的な官僚組織は諸悪の根源と思われた時代である。ICUがまだ小規模だったこともあって、行政は組織というべきものを持たなかったとも言える。外国からの巨額の援助があったことも、日本の社会的経済的環境から独立していられた大きな要因である。英語でしか書かれていない規則もあり、設置基準の制約を受ける学則とは、必ずしも整合性のないままに運用されていたりしたが、別段とやかく言われることもなかった。1960年代後半から10年間の大学紛争期、学内にはいろいろな人間関係の歪みを生じた。1970年代の末から国庫助成が始まった。外国からの援助は減少して、ICUも国庫助成に頼らざるを得なかった。会計検査は厳しさを加え、ICU独自のことにについては説明を必要としたし、その際学内規則の不整合は看過できないものとなった。渡辺保男教授が学長に就任されたのは1984年のことで、以上述

べたような事情から、「どぶさらえ」の必要が大いにあったのである。こうした基盤整備がまだ十分整わないうちに、かねてより理事会の強い要請であった大学規模の拡大を、18歳人口の激減期以前に、強行せざるを得ない事態となった。渡辺学長の8年間の苦闘は、一種剣の刃渡りのような仕事であったと思うのである。

人文学者や理学者は、精密な分析に基づく矛盾のない論理の組立てに、とかく自ら酔うところがある。しかしながら行政的決断は、多くの場合複雑な利害関係の調整を必要とし、見るかげもない妥協の産物と化することがしばしばである。社会学者である渡辺学長は、細かい点は捨象して、大局的判断からぱっきりと決断されることが多かったが、だからこそ決断できたことが多々あると思われる。左と右の主張があれば中をとる、喧嘩は両成敗、といった具合である。単純であることは、結局説得力を増すものだとすることを、私はしばしば教えられた。

どんな組織体も、周囲の環境と隔絶しては結局生き延びられないことを、渡辺学長は常に意識しておられたように思われる。氏は東京大学法学部の出身であるから、自然に中央地方を問わず、有力な地位にある友人を多く持っておられたし、政府や地方自治体の委員会の委員をも務めておられた。それらの交友関係から、政府の施策や一般世論の動向を大掴みに把握して、大学のとるべき方向性を考えられたようである。まちづくり研究会など、三鷹市との提携を深められたのも、地方自治体と大学の関係が、今後重要なものになるとの判断が働いていたのではないだろうか。

渡辺学長は、内部的には、人間関係の歪みから来る衝突を極力避けながら良い意味での官僚組織化へと転換を計り、同時に、外部の社会的経済的状況に大学を適合させるあり方を目指したといえることができる。しかしそれは、日本的なものへの単なる復古的運動とは、断然異質のものであったことに注目しなければならない。国家秘密法の上程や大嘗祭に際しては、凜乎とした態度で公に批判的意見を表明された。戦争に対する強い反省、キリスト教信仰に根ざす清冽な生き方が、行政学者としての渡辺保男学長の根底を貫いて

いたのである。

(本学学長)

故人の愛した聖句と人

古 屋 安 雄

故人は生前から葬儀は弔辞なしの説教だけにするようにということを強く言われておりましたので、その遺言にしたがって行うことをご了承下さい。

ICUの歴代の学長の中で在職中に亡くなられたのは渡辺先生が初めてであります。第一期の4年間はお元気で激職をこなしておられましたが、第二期の後半に入ってから健康を害され病気がちになりました。それに加えて例の「大嘗祭」について日本の将来を憂えてキリスト教系四大学学長の一人として声明を出されて以来身の安全が案じられるようになり、さらに国際関係学科の新設のための心労が重なって、心身ともに大変苦勞されました。渡辺先生の愛する聖句、聖書の言葉はすべて苦しみ、受難、あるいは試練に関するものであります。それは先生の生涯において経験された数々の苦勞、苦難、戦争中のこと、ご兄弟お二人を早く亡くされたことなどのゆえと想像されますが、やはり晩年、とくに学長になられてからの御苦勞、御苦難が大きかったからだと思います。

しかしそのような苦難の中にあって毅然として所信をまげずになすべき職務を忠実にはたそうとされました。その点では学長は私と生まれが同年同月の一日違いであります。古い日本人の面影がありました。死期を覚悟されてから書かれたものの中にアメリカ留学中の桂子さん夫妻にむかってこう記されたものがあります。「このようなことで帰国する必要なし。御地にて勉強にいそしむが最大の孝養。明治、大正、昭和前期の留学生のことを思え」。

それで思い出されますのは学長になられるずっと以前ですが将来、暇になったらぜひ書きたいと言っておられたある人の伝記のことです。それは御年配の方々以外は御存知ないかと思いますが、昭和初期のわが国の名外交官といわれた斎藤博氏の伝記であります。斎藤博は昭和9年駐米大使となり、満州事変以来悪化しつつあった日米関係の調整のため、軍部とアメリカの間にたって非常に苦勞した人です。しかしその在職中に病に倒れ、大使をやめ、療養中昭和14年にワシントンで他界されました。ところが当時のアメリカ政府は異例なことに、斎藤前大使の遺骨を軍艦（巡洋艦）アストリア号でワシントンから横浜まで運んで、その平和のための努力に対する敬意を表わしたのであります。

渡辺学長が斎藤博の伝記を書こうとされたのは今日の日米関係の悪化の時にきわめて意味深長であります。とくに国際人を養成することを目指しているこのICUにおいて、この大学で学ぶあるいは学んだ者の中から外交あるいは経済上の立場は異なっても交渉相手の国の人々から敬愛される斎藤博のような日本人がでること、このことを学長は強く願っていたからであります。しかしそのような、いわば「時の流れに抗して」も平和のため国際親善のために努力する人はいつの時代にも多くの苦勞、多くの苦難を覚悟せねばなりません。問題はもししたらそのような苦難の中にあって、謙虚に自分の弱さを認めてなお希望を失わずに、正しいことのため、邁進することができるかであります。渡辺学長が愛されたこれらの聖句はすべてそのことにかかわるものであります。

ローマの信徒への手紙5：3以下、使徒パウロの言葉です。

「(わたしは) 苦難を誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むことを。希望はわたしたちを欺くことはありません。われわれに与えられた聖霊によって神の愛がわたしたちに注がれているからです」

コリントの信徒への手紙二 12：9以下、これは痛みを伴う持病「肉のとげ」で苦しんだ使徒パウロが、その苦しみがとり除かれるようにと神に

祈ったことについて記されたものです。

「すると主は『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中にこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だからキリストの力がわたしの肉に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえわたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜならわたしは弱いときにこそ強いからです」

これはこの世でいういわゆる弱さとか力がない、ということが、イエス・キリストにあっては逆に強さであり、力であるという逆説の真理について述べたものであります。そして信仰とは、この逆説の真理を信じることに他なりません。この逆説の信仰が弱いわたしたちを苦難や逆境にあっても力づけ、励まし、絶望や諦めに陥るのではなく、真理のために闘わせ希望に生かしめるのであります。この信仰を学長は学生時代に東京大学総長であられた矢内原忠雄先生から学ばれました。御承知のように矢内原先生は戦時、平和と正義を主張して東京帝国大学を追われた経済学の教授であります。

行政学の教授から大学の学長となった人に、ウッドロウ・ウィルソンがいます。御承知のようにプリンストン大学の学長のあとアメリカの大統領になりましたが、渡辺学長とよくこの人についても語り合いました。ウィルソンは幼少の時からいくつかの持病があって、生涯それに苦しめられましたが、その生涯でもっとも苦しんだのはその晩年、第一次世界大戦のあと彼の提唱した国際連盟にアメリカの上院が反対し遂に加盟しなかったときであります。その時のことをウィルソンは亡くなる前、次のように告白しています。「もしもわたしに信仰がなかったら、わたしは発狂しただろうと思う。しかし私の神への信仰は、神は人間の邪悪や過ちを通して御自身の計画を必ず遂行されるという信念を固くしてくれた」

第二次世界大戦のあと、このたびはアメリカが国際連合の創立を全面的に支持して今日に至っていることは御承知の通りであります。またウィルソン学長も8年の在職期間の前半は順調でありましたが後半は学内行政の面で苦

難に出会っています。しかし今日「プリンストン大学の特色 (The Character of Princeton)」でいわれているユニークな教育の精神や制度のほとんどはウィルソン学長の時代に始まったものです。同じように渡辺学長がいろいろ苦勞されて始められたことも、それが神の御意になかったものであれば、必ずやICUの伝統となるであります。学長はこの信仰を持って多くの苦難に耐えられたのであります。信仰は苦難の中にあるものに希望をもたらすからです。そしてこの信仰は同時に悲しみの中にあるものに慰めをもたらしてくれます。「神はあらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださる」(Ⅱ Cor, 1:4) 神であり、とくに悲しむものを慰めてくださる神であります。

御夫君と御父上を失われて深い悲しみとさみしさの中に残されました奥様と桂子さんの上に、死からの復活の信仰がもたらす深い慰めと恵みが豊かにありますように心から祈ってやみません。また現職の学長を失ったICUが渡辺学長の苦難とその死を無にすることなく、学長がそれこそ命をかけられたICUの使命の達成のため教職員一同そして学生一同もここにあらためて、学長の信仰を継承することを各自心に銘じつつ、先生と天国で再びお会いする日までのお別れをしたいと思います。

お祈りします。

御在天の父なる御神

この世の旅路を終えた兄弟、渡辺保男の魂が主の愛と憐れみと赦しによって安らかに憩うことができますように祈ります。私どもの敬愛する渡辺先生をこのICUの教授として、また学長としてお与え下さいましたことをあらためて深く感謝申し上げます。どうかその信仰と遺志を継承しつつ、このICUに与えられている使命を忠実にはたすことができるよう、私どもを正しお導きください。とくに兄弟を天に送られて深い悲しみとさみしさの中におられる御遺族をかえりみ、あなたよりの慰めと励ましをたまわようお願い申し上げます。

これらの祈りと感謝と願い、渡辺学長がつねに仰ぎ見つ生きた、救

主イエス・キリストの御名によって御前に捧げます。

(1992年2月16日、本学教会堂で行われた故・渡辺保男大学葬における説教)

(本学大学牧師、人文科学科教授)

渡辺保男さんを偲ぶ

阿 利 莫 二

渡辺保男さんが研究生として辻清明先生の指導を受け、私と同門の士となったのは、1952年の春のことである。私が法政大学に赴任したのはその秋だから、研究生として交流した期間は短い。しかし爾来40年、仕事上は当然だが、それ以外にも一緒になる機会は多かった。

とくに1974年、私が地方自治総合研究所の代表としてその創設運営に与ることになってから、何かと協力して頂き、お呼びすればまず休まれたことはない。とりわけ第二臨調に際しては、研究所が事実上「国民臨調」のセンターとして大きな役割を果たしたが、専門調査委員として多忙だった保男さんは、私のお願いに嫌な顔一つ見せることもなく、研究所に足を運ばれては貴重な意見を提供されたものである。

渡辺保男さんの学風はシャープな理論構築という向きではない。実証的な歴史や実態についての孤高を重んじた研究生活に彩られている。そして各地の実態調査にも参加されたが、グループ作業よりも、統計的な調査に強い関心を示していた。1955年、板橋区で私たちグループの第三回目の総選挙の実態調査があり、この時保男さんの提案で選挙民の意識調査が行われた。私達の選挙調査に、本格的なサンプリングによる統計的手法が導入されたのはこれが最初である。手動の計算機の姿が何故か脳裏に残る。ある事情でこの調査の結果が発表されていないのは残念である。経緯は失念したが、その後や

はり保男さんの発意で中央官庁の管理職の意識調査が行われた。その集計結果はガリ版刷りのものが残されている。これらのことは私達の世代以外には余り知られていないかも知れない。

東大法学部の研究室で最初にお会いした時の印象は、大人しい育ちのよい一見ひ弱な青年。やがて屈託のない紳士、飾らず、しかし板に付いたスマートな身なりが印象的になっていった。クリスチャンであることは知っていたが、信仰は内に秘められ、その顕示は一度たりとも感じたことはない。きっと、それが真のキリスト者としての姿だったのだろう。何かの苦悩をふっと感じさせることはあっても、談話には笑いとユーモアそしてアイロニーを欠かさない、そして暖かみのある人だった。

私にとって生涯忘れられない思い出がある。私が入院すれば必ず見舞ってくれた渡辺保男さんだったが、保男さんが加藤一明・加藤芳太郎・佐藤竺の三氏と共著「行政学入門」を企画された時のことである。重病の床にある私を見舞い、「書かなくてもよいから共著者になっては」との話があった。私は辞退させて頂いたが、その暖かい友情に如何ほど心を打たれたことか。

人は去るときにその人を現すとか。深き信仰、強靱な精神、仕事への責任感、家庭人としての情と理。それらに於いて渡辺保男さんが驚嘆すべき人であることを、その去る姿から教えられた。辻先生とのお別れの時にお会いした時、保男さんの声と姿のその変わり方には痛々しいというよりは何か悲壮なものさえ感じられた。そして、案ずるわが子を諭して海外に送り、まもなく訪れる時を心に刻み、その日のための讃美歌のみを求めて弔文は一切辞したという。葬儀のおりにそのようないくつかのお話を伺ったが、私は言葉に尽くせぬ畏敬の念と感動を覚えた。

渡辺保男さんの去り方は壮絶ともいえる。少なくとも私にはそう思える。保男さんは去る時に、私が知り尽くし得なかった保男さんの一面を教えてくれたのである。私は今日まで数多くの人の暖かい力のおかげで生きて来れた。その何人もの人がもういない。渡辺保男さんが去ったことで、私はまた

一人大切な友人を失って仕舞った。今は只、保男さんの在りし日を偲び、忘れられない思い出に浸るだけである。

(法政大学総長)

行政学研究会当初の頃の思い出

高 木 鉦 作

私が渡辺君を知り、話をするようになったのは、学生時代の1950年で、辻清明先生の演習に参加した時からであった。その翌年、私は大学を卒業して東京市政調査会に就職したが、その年に辻先生を中心にして行政学研究会が発足した。渡辺君も私も行政学研究会に参加することができたので、演習の時に続いて、その後も渡辺君と会い、話をするようになった。

行政学研究会も発足当初の50年代頃は、メンバーも少なく、お互いに若かったので、気楽に話し合い、行動を共にしていた。その頃のことである。経済白書が「もはや戦後ではない」と書いた1956年には、石原裕次郎が主役の映画「太陽の季節」（兄の慎太郎の小説を映画化）がヒットし、「太陽族」という言葉が流行語となった。

その翌年であったと思うが、夏休みを逗子で過ごすことにしていた大島太郎君が、一日、太陽族をして遊ぼう、皆で海水浴をしようではないかと呼びかけた。それに応じて、行政学研究会のメンバーで都合のついたものが、逗子の大島美津子夫人の実家で世話になり、浜辺にでて海に入ったりして、一日を楽しく過ごしたことがあった。

その当時、鎌倉に住んでいた渡辺君も参加し、皆と一緒に浜辺にはでた。しかし、渡辺君だけは海に入らないで、浜辺に腰をおろして、黙って様子を眺めていただけであった。若い人でごったがえし、騒々しくて、海の水もき

れいではなかった。そんなところでは、泳ぐ気持ちにもなれない。渡辺君が海に入らなかったのは、そんな気持ちによるものではなかったか。私にはそのようなにも思われた。

その渡辺君が後に逗子に住むようになってから、渡辺君が逗子の海で泳いでいると聞いたときには驚いた。後日、渡辺君に会ったとき、そのことを話題にしたら、実に快適だと笑いながら話すので、太陽族のことを思いおこし、渡辺君も変わったと思ったことがあった。

1950年代は占領が終わり、地方制度の改革、町村合併などが行われ、自治体の工場誘致などが問題になっていた時期であった。また、その頃は、都市や農村の政治実態調査が行われ、行政学研究会のメンバーの中には、それらの調査に参加していたものも少なくなかった。そうした事情も影響していたと思うが、その当時は、地方自治をめぐる諸問題が、行政学研究会ではよく論議され、話題になった。しかし渡辺君はそれらの論議を黙って聞いているだけで、論議の中に入るということはなかった。その当時の渡辺君の関心は国政レベル、主としてアメリカの政治、行政の問題で、日本の自治体レベルの問題ではなかったようであった。

逗子の浜辺で遊んだ前後の時期に、行政学研究会のメンバーが、千葉県の四街道町と、東京都の五日市町の町村合併の実態について調査した。五日市町の調査のときには、渡辺君も現地調査には同行したが、報告は執筆しなかった。その点では、太陽族のときと同じであった。

ところが、アメリカの留学から帰った後、渡辺君は日本の自治体レベルの問題にも積極的に取り組むようになり、調査会や研究会の活動にも参加されるようになった。私も、辻先生が委員長をされた全国知事会の自治制度研究会で、渡辺君と一緒に現地調査に赴き、ともに報告書を提出した。

私の勝手な判断にすぎないが、国際基督教大学に移られ、アメリカの留学から帰られた頃から、渡辺君の行動や関心が、それ以前とは少し変わったのではないか。以上のような思い出からして、私にはそのように思われる。

渡辺君が国際基督教大学に移られる少し前に、私も東京市政調査会を退職

して、國学院大学に移った。その頃から、お互いに雑事に追われたりして、段々と会う機会も少なくなり、会っても挨拶するだけか、用件を片付けるだけで終わるようになった。東京市政調査会に勤務していた頃には、ときどき渡辺君が私の勤務先に寄られ、二人で雑談をしたが、そういうことはなくなった。

私が渡辺君と最後に顔を合わせたのは、辻先生がなくなられた夜、自宅で御通夜が行われたときであった。渡辺君とは久しぶりに会ったが、渡辺君の身体が弱っている様子に驚いた。気にはなったが、渡辺君とは顔を合わせ、会釈をただけであった。辻先生の葬儀の式場で、前の方の席に参列されていた渡辺君の後姿には接したが、顔を合わせることはないままに終わった。その半年後に、辻先生の後を追うかのように、渡辺君も亡くなられた。

渡辺君と私の出会いは、学生時代の辻先生の演習であった。その辻先生の葬儀が、渡辺君とのお別れになった。

(國学院大学法学部教授)

40 年来の交際

佐 藤 竺

渡辺保男君が逝ってからもう20ヵ月、大学で同期だった私には未だに信じられず、「おい、佐藤君」とどこからか呼びかけてくるような気がしてはならない。とにかく、40数年の長い交際だっただけに、思い出も随分と多く、書きたいこともいろいろある。だが何よりも惜しまれてならないのは、今の医学ならもっと早く処置できたら、何とかあったのではないかということである。あれほど人一倍健康に留意され、温水プールで泳ぐのを日課にしていたほどの人が、誘って頂きながら遂に実行しなかった私たち夫婦よりなれ

ろかったのか、もっともっと長生きをして弟子や友人たちにあの魅力的な語りかけをして欲しかったのにとの思いは募るばかりである。

そういえば、学長に再選されたあとだったか、何が辛いかといって外国人と英語で話をしながら会食をするほど疲れるものはないと私にしみじみと述懐して、これほど会話達人な人でもそうなのかと驚いたことを思い出す。他人には上べから理解できないこういった心労が、彼をむしばんでいたのかも知れない。

渡辺君は私に対して本当に親切で、いつも親身になって世話をしてくれた。1971年の秋から4ヵ月ほど欧米各地を歴訪することになったとき、彼は香港から留学中の院生2人を私の所へ差し向けてくれ、連日交互に英会話の特訓を受けることができた。曲がりなりにも14ヵ国を一人旅できたのは、彼の好意によるものであり、今も感謝している。

院生といえば、私が彼に感謝しているいまひとつの思い出がある。1965年の秋から年末にかけて、彼が私にICUの行政学研究科で院生に教えて欲しいと頼んできたことがあり、私も大学院の出講は初めてなので張り切って講義の準備をして出掛けた。ところが10人ほどの院生たちは、ちょうど出版されたばかりの私の『日本の地域開発』をみな持参していてこれをテキストにして勉強したいということになり、またそれぞれが近く提出する予定の修士論文について報告をし、私の批評を求めてきたのであった。このわずか3ヵ月間の出講であったが、その院生のなかにおられた今村都南雄君や中村紀一君とその後長く親しく交際を深めることができるようになったのも、いうまでもなく渡辺君にすべて負っているわけである。

渡辺君と私が初めて出会ったのは、大学3年の夏であった。彼がのりとアイロンのきいた白い開襟シャツを着て、太い黒ぶちの眼鏡をかけ、静かに語りかけてきたのが今も鮮やかにまぶたの裏に焼き付いている。そのあと特別研究生の空きがないとかで彼は1年留年したが、私などとは生まれや育ちが違って、日本中がまだ貧しかったなかでどこか一味違った気品に溢れ、しかも嫌味のないその人柄にひかれてよくダベる機会があった。病をえてからの

彼は、顔色が黒ずみ、サングラスをかけておられ、私たち夫婦は彼と会うたびにインドの貴公子然としてきたねとうわさしながら、どこか悪い所がなければよいかと案じていたが、この不安は不幸にも的中してしまった。

彼と私が最後に行動を共にしたのは、1988年9月ブダペストで開催された国際行政学会のラウンドテーブルであった。彼は、当時辻清明先生の後任として同学会の副会長の要職についており、1度も会議に来ないと文句をいわれたとかで、初めて出席し、連日会議を主宰したり、役員会に出たり忙しい思いをしていた。このとき辻先生御夫妻も参加され、私共夫婦もイギリスの出張先から駆けつけたが、辻先生が大変お疲れの様子なので彼が心配して、自分は御一緒できないので、私たちに時折市内見物などにお連れして欲しいと頼んできた。お蔭で私たち夫婦は辻先生御夫妻と歩き回れ、楽しい思い出を残すことができたが、彼も要職にさえなければ少しはゆっくりできたのにと悔やまれてならない。

彼と私は、最初のころ私もアメリカの第三党運動とか日本の公務員制度を勉強していたこともあって、単なる同窓同門以上の親しみを覚えていただけに空しさも大きい。今となってはひたすら御冥福を祈るのみである。

(山梨学院大学教授)

渡辺保男さんを偲ぶ

野村 銀市

渡辺保男さんに初めてお会いしたのは、昭和25年、東大の辻清明先生の行政学のゼミであった。以来、40余年にわたる長い間に何回かの出会いがあり、その度に渡辺さんには格別のお世話になったり、ご苦勞をおかけしたり、心に残ることが多かった。心からの感謝の念をこめて、その時々の渡辺

さんを偲ぶことにしたい。

昭和42年、渡辺さんはコロンビア大学での研究のため、ご一家でニューヨークに住んでおられた。その年私は、姉妹都市間の職員交換計画に基づいて、東京都からニューヨーク市に派遣を命ぜられ、約8カ月間、同市に駐在することとなった。

ニューヨークに私が到着して間もなく渡辺さんにお会いし、また渡辺夫人と私の家内が同窓であることもあって、しばしばコロンビア大学近くのご一家の住居を訪ね、歓談する機会があった。

渡辺さんは、私の記憶によれば、訪米前は国家行政機構や財務行政、予算制度などに、研究の関心がより高いように思っていたが、ニューヨークでお会いしたときは、アメリカの行政の実態に直接触れられた結果であろうか、地方自治、市民参加、都市問題などに強い興味を抱いておられた。それらのテーマは、私にとって最も関心の深いテーマであったから、渡辺さんとお会いして語り合うことは、私にとって大変有益であり、教えられることが多かった。

愛嬢桂子さんは当時6才の頃で、大変可愛らしく、渡辺ご夫妻にとって目に入れても痛くない様子であった。渡辺さんが運転して、ご一家とともにプリンストン大学のキャンパスを訪れたとき、すばらしい緑の環境に恵まれた小さな大学町を散策したことも懐かしい思い出である。

渡辺さんは、東京都政にたいしても大きな貢献をされている。

昭和54年、鈴木都知事が就任して、赤字財政を再建するため、直ちに財政再建委員会を設置した。渡辺さんには、同委員会の委員をお願いし、小委員会では都の行政改革のために、非常に大きなお骨折りを頂いた。この委員会の中には行政学の教授は渡辺先生お一人であったから、その影響力は格別に大きかったのである。

このとき、私は都の副知事であった。渡辺さんに真剣に取り組んで頂いたことは、特に印象に残っている。

財政再建委員会は答申を知事に提出し、これを受けて、東京都はこの答申

を忠実に実行した結果、知事が4年後までに財政再建を達成するとした公約を、3年後の56年度で果すことができた。

現在国際連合本部のスタッフとして大活躍されている鈴木絲子さんを、平成2年、渡辺学長自ら同道して、私の勤務する東京フロンティア協会の事務所を訪ねてこられ、学長が鈴木さんを紹介された。その趣旨は、国連が世界の大都市、特に人口急増の著しい発展途上国の大都市の経営を確立するために、世界の大都市の幹部を集めて、東京で都市経営世界会議を開催したい。これには国連が東京都庁に資金面を含め全面的に協力を頂きたいので、東京都庁に口添えを願いたいということであった。

私も渡辺学長のお話と、鈴木さんの熱心な説明を受け、都庁の方に橋渡しをした。

私は、学長自らが教え子のために、わざわざ付き添って訴えられたことに大変感動したのである。

その後、この話は具体化に向って進み、今年（平成5年）4月20日から23日まで4日間、東京都庁において、国連と東京都の共催により（国連が自治体と会議を共催することは異例である）、世界の五十余の大都市と日本の指定都市を合わせて六十余の都市が参加した都市経営世界会議が開催され、大きな成果を収めることができた。

鈴木さんもこの会議に国連のスタッフとして来日して大活躍をされ、実行委員の一人であった私も参加し、短時間であったが、鈴木さんと渡辺学長を偲んで語り合うことができた。

渡辺さんがもしお元気であつたら、必ずこの会議に参加され、大きな役割を果されたであろうと考えると、まことに残念でならない。

心からご冥福をお祈りいたします。

（本稿は、平成5年1月30日ICUで開催された渡辺保男記念式で行った追悼スピーチに若干の加筆をしたものである。）

（東京フロンティア協会事務総長）

渡辺保男学長の美学

絹 川 正 吉

渡辺保男先生を学長に選任した「学長選考委員会」に、私は評議員会からの委員として、二回とも参画した。また渡辺先生が大学院部長および学長であったその殆どの期間、私は理学科長として、また教養学部長として公の関わりで先生に接してきた。その間、多くのことがあったが、その一、二を記して追憶の言としたい。

教授会で私が教養学部長に選出されたとき、「不協和音がキャビネット(行政者会議)に入ってお困りにならないか」と言わずもがなのことを渡辺学長に申し上げた。すると「君も年相応のことで、良いのじゃないの」とかわされてしまった。かくして渡辺学長の下で次々に迫り来る難題を担う羽目になった。

第一の難題は語学科改組問題であった。私が学部長に就任する直前に、したがって私が関与していないところで、渡辺キャビネットは「当分の間、語学科の運営をキャビネットが預かる」ことを決定した。(その理由をここで述べることはできない)。およそ「教授会自治」の通念からすれば、そのことは超法規的断行であった。それが最善の方法であったか否かは別として、そのような決断ができるところに、渡辺学長の行政者としての資質を、私は見る思いがしたのであった。その後、問題は誰が鈴をつけに行くのか、ということになるが、教学部門についてはその役割は着任早々の私に全て任されたのである。かくして、この一事のために私のエネルギーの多くが奪われることになったが、その間学長からは具体的指示は殆どなかったように記憶している。ここには渡辺学長の行政者としての別の資質が表れていたと思う。

第二の難題は語学科改組問題と連動しているが、「国際関係学科新設」の案件であった。国際関係学科の新設については批判的評価もあるが、諸般の

事情から渡辺キャビネットとしては不可避の課題となっていた。しかし、この案件は語学科のみならず、学内最有力学科である社会科学学科の改組も含む難題であった。それは「生身を裂くような暴挙だ」という激しい批判の声も耳にした。渡辺学長はこれも実行を決断した。そして紆余曲折の末、新設業務（法人部門を除く）の責任が再び学部長に廻ってきた。そこで、教員人事については実質上の責任を学長が取るという条件の下で、私はこの難題を背負うことを承知した。通常は（準備期間を含めて）最低5年間は要するといわれている（殆ど学部規模の）新学科の創設を、2年余りで実行した。その間、学内関係機関の調整と文部省への対応に難渋した。学部長の調整に不満足なある教授は、数多くの資料を用意して、教授会の席上で1時間にわたって学部長の対応を詰問する、というようなことまで起こった（もっとも、その直後の選挙で私が学部長に再任されたことで、結果としては渡辺キャビネットの対応を教授会は支持したのであった）。ところで渡辺学長はその教授会では全く沈黙しておられた。そして、このような激しい応対を強いられた直後の私に、一言も声をかけられなかった。その時はそのことに気付かなかったが、いま考えてみるとそれは不思議なことである。無情な対応とも見える。渡辺学長は私の対応に不満足であったのだろうか。私は以下のように類推する。学部長が激しく攻撃されていたとき、渡辺学長の心情としては、わが身が攻撃されていると感じ、その苦衷をじっと耐えておられた。寡黙な渡辺学長は、そういう自分の心情を表に出すということを好まなかったのであろう。このように考えてみると、そこにも渡辺学長の行政者としての資質の一端を見る思いがする。以上の類推は独断ではない。渡辺学長は時々思いついたようにメモを私に届けられることがあった。そのメモ用紙は何かの書面の余白をちぎったものらしく、破れ跡をとどめているようなものが多かった。ある時、新設学科の人事の進捗状況を知らせるメモのはじめに、(1)と番号をつけて、「日頃の御苦心のほど察するに余りあり深く感謝いたします」と書かれてあった。

渡辺学長は自分を律する原則のようなことを秘めておられた。それを「美

学」と言われたことがある。学長の任期が終わっても、一教授としてICUに残ることは、「ぼくの美学が許さない」と言われたことがある。また渡辺学長は飲食を共にして人を慰労するというようなことは好まれなかった。いわゆる日本の男性社会の交わりの仕方には極めて冷淡であった。そのようなことも、渡辺学長の思想の表現に関わっていることではなかろうか。

渡辺学長にとって思想的に最も重い試練は、昭和天皇の大喪に関して「基督教大学学長声明」に連署したときのことでなかったかと思う。その一人の自宅が狙撃されるという事件が起きて、渡辺学長の自宅にも警察の警護が行われた。その不自由な生活のことをキャビネットの会合の合間に語っておられたが、そのときの風貌には弧愁が漂っていた。基督教大学の学長という公的立場上、個人の考えが基礎にあったとは思いますが、思想的対決を単独で担う決断を渡辺学長はされたのだ、と私はその時思った。「昭和天皇大喪の日」を国民の休日にするという政府が決定したことに対して、ICUは当日を休日としないことをキャビネットで決定し、その旨を学長名で公示した。その公示文（『ドキュメント明治学院大学 1989—学問の自由と天皇制—』岩波書店、1989、所収）は渡辺学長が起稿した。その中で、ICUは日本によって災禍を被った国々の人々も参加する共同体であるから、休日として弔意を強制することはできない、と述べている部分は渡辺学長の創案である。ここに渡辺学長の基督教大学学長としての思慮が表現されていたと私は思うのである。

私が学部長の激務から解放されて、アメリカへ向かうために自宅を出ようとした直前に、渡辺学長から最後のメモが届けられた。こんどはちぎられた紙ではなく、立派な用紙に走り書きで私への謝意が述べられてあった。渡辺学長と私との人格的関わりは、それが最後であった。計報を私はパークレーの空の下で伺った。

（本学理学科教授）

渡辺保男先生の感覚と姿勢

並 木 浩 一

今から二十数年前の大学紛争という不幸な一時期に出会ったのが機縁で、わたしは渡辺保男先生との交わりを与えられた。先生の第二期目の学長時代には、わたしも執行部の一員となったので、先生との交流は仕事上の関わりが中心となった。しかし個人的な交わりが消失したわけではない。諸報告のために柴沼明財務副学長に同道して先生を東大病院の病床にお訪ねした際、わたしたちは祈りのひとときを持ち、パウロの言葉に託された先生の信仰の境地をおうかがいしたことがあった。先生との交わりにおける忘れがたい思い出である。その次に先生を病院にお訪ねしたときには、先生はわたしたちに現任の学長としてのご自身の葬儀についての要望を語られた。

それをわたしたちは心にとめた。もちろんつらい思いで。先生が第二期目の学長のお引受けを渋ったのは当然であったのだ。にもかかわらず結局学長を引き受けられた。そのご苦勞によって病いが進んだことは疑いえない。それゆえ、先生からご自身の葬儀についての指示をうかがうのはつらいことであった。しかし同時に、先生の覚悟を通してわたしたちの側の覚悟がうながされ、心に落ち着きを与えられたのも確かである。

思いがけずに早く訪れる自己の死を前にして人がいかなる態度を取るかにについては、日頃の生の姿勢が物を言うであろう。先生の場合、わたしが思いつくのは、事柄に対する距離の設定と私に対する公の優先という先生の日頃の姿勢である。前者について言えば、例えば本学に対する先生の関わり方がそうである。先生は人生の最後の時期を本学の行政のために捧げられたが、常に醒めた目で本学の現実を見ておられた。本学の理念に酔うようなところは毛頭なかった。大体自己陶醉に陥ることほど先生が嫌った事柄もなかった。対象に密着することなく、突き離して見ること。先生はこれに長じてお

られ、最後には自己の生をそのように見る対象とした。

先生にとって公とは、私的なものを超える具体的普遍であった。そのような公の優先がご自身の葬儀についての要望の根底にあった。キリスト者の葬儀は礼拝としての公同性を貫くべきであるから、たとえ大学葬であっても、私情や人間関係への顧慮が入り込む余地のある弔辞は止めること。これが先生のお考えであったと思う。これは突きつめれば、公同の礼拝としての葬儀が個人の私的死を乗り越えるのだと言えよう。大学葬に参加されたあるキリスト教主義大学の学長が、キリスト者の葬儀はかくあるべし、との感想をある方に語ったという。

大学葬を司式し、式辞を述べたのは大学牧師古屋安雄教授であった。その式辞の中で、渡辺先生が戦前の駐米大使斎藤博に多大な関心を寄せておられたことの紹介があった。斎藤大使は日米関係維持のために最大限の努力をしたが、遂にかの地で病没した。彼は病を得たときに直ちに大使を辞任していたが、米国は現任大使の死に際してと同じ扱いをもって、彼の遺骨を巡洋艦で日本に送り届けたという。日米開戦の4年前のことであった。この人物に先生が魅かれるのは、いかにも先生らしいことである。古屋教授によれば、彼には米国での女性関係で多少の華やかさがあつたらしいことを先生が楽しそうに語っておられたという。公私の二面をはっきりと区別する先生にとって、私的な事柄は先生の美意識との関わりで然るべき評価の対象となり得た。先生は狭い丁見が嫌いであった。

先生を語るときに忘れてならないのが、天皇の代替わりに係わる一連の国家行事についてのキリスト教主義四大学（関西学院大学、国際基督教大学、フェリス女学院大学、明治学院大学）の学長たちの共同の批判声明への参加である。個々の教員の批判は、学長の立場にある者が引き取って、大学としての一つの姿勢を明らかにすべきであるとの考えを先生は鮮明に表明された。この声明は現行憲法の規定する象徴天皇制と旧日本の神権天皇制との区別を曖昧にする国家行事に対する批判を骨子としていた。日本はこの区別を明瞭につけない限り、古代国家とのへその緒が切れず、近代国家の普遍に達

し得ないであろう。では日本がこれを達成できるのか、という問に対しては、先生の答えは辛かった。民衆による王殺しを一度も経験したことのない日本は近代国家になり得る条件を欠いている、というのが先生の口ぐせであった。もっともこれは議論のための意見に過ぎないのであって、思想の個人的基盤は無きに等しかった。先生はおよそ争いを好まず、学長として学内関係者にはっきり反対を表明してがんばることすら苦手であった。言わずじまいの苦笑いが印象的であった。(1993.7.2)

(本学人文科学科教授)

Christian Belief, Democracy and Internationalization

James Elliott

I first met Professor Watanabe in 1972 when I was introduced to him and Professor Kiyooki Tsuji of Tokyo University, by my professor from the London School of Economics and Political Science (LSE), Professor W.A. Robson. During his visits to Tokyo as an adviser to Governor Minobe, Professor Robson resided at ICU through the good offices of Professor Watanabe. This action of Professor Watanabe was typical of his essential kindness which at times people did not see because of his rather retiring even shy personality. Over the years I benefited greatly from his kindness, advice and hospitality at his home at ICU and later from weekends at his home in Zushi. He was always willing to share his thought upon the current political situation in Japan and overseas, over dinner or coffee or walking along the beach at Zushi. Through his long connection with public administration in Japan he had an almost encyclopaedic knowledge of people and situations. He carried an ancient tattered tiny address book readable only to himself from which he could extract names

and telephone numbers of key officials and professors all over Japan.

Professor Watanabe's Christian faith was strong, but reflecting his personality was not proclaimed loudly, but in the quiet performance of good works and in producing good fruit. When he joined ICU, he was a Non-Church Christian but later he joined and supported his Church in Kamakura. It was natural that he should become a teacher at ICU, in 1959 as a part-time lecturer and from 1966 as a full-time member of the faculty. It was natural because his Christian faith and political beliefs were very similar to ICU's founding ideals and international and democratic objectives. It is also natural that Christian faith will express itself in doing good works but also in striving for and defending what is right and true.

With Professor Watanabe it expressed itself in his teaching, research and as an adviser to government and as a worker for public administration in Japan and overseas. His Christian beliefs sometimes led him to witness in places where his retiring personality would not have normally led him. For example, he took part in the procession and demonstration in Mitaka on June 12, 1960 by ICU faculty and students, for peace and against violence and against the Japan-USA Security Treaty and the actions of the Kishi Government. He believed strongly that Japan should be an active positive force for peace in the world and that the Constitution and its peace clauses should be respected. The ideals and the educational and international ethos of ICU support these beliefs.

Another example of the Christian witness of Professor Watanabe was when he signed the Statement, as one of four Presidents of Christian universities in Japan, against the religious ceremonies for the new Emperor. He felt the ceremonies for the Accession were against the Constitution, current law and a threat to democracy.

"To hold such a ceremony is a clear diversion from the principle of the separation of government and religion. It can only be feared as a movement toward a return to the imperial divine sovereignty and away from the present system in which

the emperor is defined as the symbol of the unity of the state. It will inevitably invite suspicions of those neighboring countries to which Japan, under the guise of imperial divine sovereignty, caused such tremendous suffering.

We, as persons bearing responsibility toward Christian universities in Japan, can no longer remain silent about these events. We hereby make clear our deep concern and appeal to the Government to reconsider these matters and urge that broad and free discussion take place."

Professor Watanabe felt uncomfortable and under stress in making such public statements and being the subject of media attention. Yet he felt such a witness was vital to protect democracy. Democracy is very fragile and needs to be continually protected and supported. Financial corruption in Japan since the end of World War II by politicians has been considered by the courts but corruption of the democratic institutions by politicians is more serious. Those who believe in democracy and the importance of integrity and honesty in public life must be prepared to speak out like Professor Watanabe. This kind of witness is not without its dangers, and overseas observers have been alarmed by the violence of right-wing groups against such criticism. What has also been alarming has been the lack of control over the violence of right-wing groups by the authorities. This reflects the experience of the liberal left-wing academic Harold Laski, a professor of politics at the LSE in the 1930s and 1940s. Professor Watanabe was a co-translator with Professor Tsuji of Laski's book, *Reflections on the Constitution*, in 1959.

Another aspect of Professor Watanabe's Christian faith and democratic belief was internationalisation. Christianity teaching sees no difference between races and ethnic groups, all are children of the one God. Democracy and liberalism should also cover all races and all nations. With this belief teachers such as Laski and Watanabe would also express a concern for the poor and needy anywhere in the World. When Watanabe became President of ICU in 1984 one of his priorities was

to try and make ICU yet more international. He strongly supported the overseas exchange programs, the establishment of ICU Cambridge House in England and the creation of the new International Studies Division at ICU. In this he was also concerned to balance the large American faculty at ICU with other foreign groups and influences. Professor Watanabe was a strong supporter of the International Institute of Administrative Sciences and represented Japan on its Executive Committee. He also supported the United Nations as the major International force for peace and was one of the main organisers and speakers at an international Peace Forum at his church in Kamakura, at which I also spoke.

Professor Watanabe dedicated most of his life to ICU and the principles on which it was founded. As ICU seeks to find new its role in the 1990s and for the twenty-first century it is useful to remember the priorities espoused by Professor Watanabe. Planning and retrenchment of any organisation can only take place if there are clear objectives and priorities on which to plan, make cuts and adjustments.

The Christian witness is essential for from this comes the commitment to the individual and the development of their creativity. Education is not just for the nation state or the economic system but for individual development. ICU stands for values and principles which are Christian but are also necessary for any civilised, humane and democratic society. These include standards of love, truth, justice and compassion and a concern for the welfare of fellow human beings in Japan and overseas. It is based on the belief that there is more to human life than material pursuits, economic gain and self satisfaction. The welfare of other human beings and the things of the spirit must also be of concern. These are expressed in a dedication to democratic and international systems and principles.

ICU has been the first and the best university in Japan in certain areas. This should also be so for the future. This requires that specific areas need to be given priority and others retrenched or curtailed. Excellence is more important than size.

It is impossible for a small university such as ICU to cover all disciplines. The international character of ICU needs to be emphasised and reinvigorated. Those aspects where the University is still strong need to be re-examined and given new direction for the twenty-first century. There needs to be a spiritual awakening to the meaning of the Christian message for Japan today and its role in the World. ICU can and should be making through its resources, faculty and students, a significant contribution to that message and the needs of Japan.

The last time I saw Professor Watanabe was in January 1991 when we had dinner together at Gakushi-kaikan. He was still his retiring self and battling his illness but he talked as always with deep concern and interest about Japan and international affairs. ICU was also in his mind and heart and he also expressed his deep faith in its ideals and its future. Truly, Yasuo Watanabe will be found by the Master, to have been a faithful steward, a wise teacher and a good man.

(本学社会科学科準教授)

Lessons from Studying Local Governments in Japan and the United States

Mark F. Peterson

My introduction to Japan came in the early 1980s from Prof. Jyuji Misumi, then of Osaka University. As part of one of my first opportunities to speak in Japan, I participated in a symposium in Fukuoka. President Watanabe was also among the speakers.

I met many Japanese scholars and business people during the two short visits I made to Japan in 1983 and 1984. President Watanabe was among the most support-

ive and encouraging. As a counterpart to my colleagues in Osaka and Fukuoka, I came to think of him as my "colleague in Tokyo" and of ICU as my "temporary home in Tokyo".

The first several projects that I did with Prof. Misumi — work to prepare an English edition of his book, *The Behavioral Science of Leadership and a study of decision making and leadership in electronics companies* — were successful. During a more extended Fulbright-sponsored visit to Japan in 1986, I considered what alternative projects to pursue next.

Perhaps the most important consideration was that I wanted any new project to be something that would connect the key scholars of leadership, decision making, and organization structure who I knew in the United States with scholars I knew in Japan. The typical pattern of interaction between the two groups seemed to me to be for Japanese and U.S. scholars to "talk past" one another rather than talk to one another. Research initiatives by Japanese scholars to study things in the U.S. were very difficult to implement, just about as difficult as initiatives by U.S. scholars to study anything in Japan.

There were other considerations. One was that informal support from some senior people in Japan would be necessary for the project to be feasible and useful. Another was that a major point of misunderstanding between the two countries had to do with the role of government in society and the relationship of government to business. What Americans knew about Japan seemed to be hopelessly muddled with what Americans knew about large Japanese businesses. Most of my business school colleagues were trying, naturally, to work with Japanese businesses. For me, studying local government and continuing the process of developing relationships in Japan from a local community base seemed an appropriately innovative (or deviant) thing to do.

Confidence in President Watanabe's support was one of the main ingredients in this line of thinking. Government, the similarities and differences between gov-

emments, and international relationships between governments were among his particular interests. In beginning with the U.S. portion of the project, I found how far his contribution had extended. In New York, I found that he had supported the doctoral work of someone who now leads a major foundation to promote U.S. - Japan cooperation. At an academic meeting, I found that it was possible to arrange help in approaching U.S. governments from a U.S. Senator because of an association he had with ICU and President Watanabe.

My first approach to a Japanese local government was made in 1986 to a city near ICU. (President Watanabe made an exception by allowing my family to stay with me at the ICU guest house. But that's a secret, so please don't tell anyone. Shhh!) That visit confirmed the decision to do the project. Since then, the study of local governments has been reasonably successful. Three Japanese cities have participated. The study has extended beyond the U.S. and Japan to now include the Netherlands, Hungary, Taiwan and India. We have learned, for example, that there are some differences in work values, goals, and norms between managers in the two countries. In some respects, though, senior managers in Japan have more in common with senior managers in the U.S. than with lower level managers in their own country. Similarly, lower level supervisors in Japan have something in common with their U.S. counterparts. We have also learned some other things that are described in various conference papers, articles, and such.

In doing the study, though, I have learned some things that will not show up in any journal. Japanese and U.S. scholars of decision making, leadership, and organization structure still usually talk past one another rather than talk to one another. (Even cliques of Japanese scholars seem to talk past one another as much if not more than do cliques of U.S. scholars.) Initiatives by U.S. scholars to study anything in Japan are about as difficult to accomplish as initiatives by Japanese scholars to study anything in the U.S. All parties seem to be reasonably satisfied with this status quo, as long as we can criticize it on occasion. Perhaps there really is something universal

about academe.

I also learned that for anything to be accomplished in scholarly relationships between the two countries — a minimum for each group to learn something about itself through its non-communication with and criticism of the other, and maybe sometimes for the two groups to learn something together — we need support and encouragement from people who show patience and persistence despite tensions and obstacles in the incessant war of words that constitutes academe. We need peace-makers. People like President Watanabe.

(Professor of Management, Director of Japanese Studies Program,
Texas Tech University)

大学院時代からの四半世紀

今 村 都 南 雄

私が国際基督教大学大学院で学んだのは、東京オリンピックが終わった直後のことである。そこで私は何人かの先達に接し、やがて行政学研究への志しを持つことになったが、ごく身近な事柄で何かと相談に乗っていただき、ご指導をいただいたのが、当時、学習院大学から移籍されたばかりの渡辺先生であった。

それ以前から兼任されていたとはいえ、新しく専任教授として来られる先生ということで、事務室スタッフの視線もおのずと集中しがちであったように思う。昼食時に本館から食堂に向かわれる先生の後ろ姿を追いながら、窓際のフロアで女性職員たちが、黒のタートルネックに黒っぽいブレザーという、先生のシックな服装ぶりを話題にしていたことなどを思い出す。

大学院の学生たちにとっては、気さくな相談相手であり、学生仲間では、

親しみをこめて「やっさん」と呼ぶのが常であった。オフィスでも廊下でも、あるいは芝生の上でも、どこでも構わず、学生たちの語らいの仲間に入ってくれた。時には、みんなで示し合わせて先生のご自宅近くに自動車で押しかけ、湘南海岸での長談義に誘い出すようなこともあった。おそらく、そのせいであろう。先生が初めてコロンビア大学に行かれる時など、びっくりするくらい多くの仲間が羽田に集まった。

もちろん、いつも四方山話しに打ち興じてばかりいたわけではない。修士論文のテーマ設定やそれぞれの主題へのアプローチの仕方について助言をいただくこともしばしばであった。私自身の修士論文の指導教授は蛸山先生であったが、特にアメリカ行政学や組織理論の動向などに関しては、渡辺先生に伺うことのほうが多かった。「行政学における組織の理論」(『思想』1959年8月号)やワルドーの著作の書評論文(『国家学会雑誌』第72巻9号)のコピーは、その頃ファイルしたままの格好で、今でも書架に残っている。

その後、私が中央大学に就職してからも、折にふれて言葉をかけていただいた。東大の行政学研究会の帰路、赤門の近くでケーキをご馳走していただいたり、お茶の水駅まで一緒にいた時のことも懐かしく思い出される。研究活動で壁にぶち当たった時には、これはという書物を翻訳をするか、ナマの事例を扱うか、それとも誰か特定の人物の生涯などを洗ってみるのがよいと教えていただいたのは、多分、その頃のことである。ご自身、ダウンズの『官僚制の解剖』やヒルの『行政の社会学』などの翻訳を相次いで手掛けられていたせいか、おのずと翻訳に関する話題が多かったように記憶しているが、的はずれな私の質問を機に、学界や世間での「礼儀作法」を失した行為に対する警句的批評へと話題を転ずることもめずらしくなかった。

また、私の留学中に、ロスアンゼルスのアパートまで訪ねてくださったり、ニューヨークで落ち合ったりしたこともあった。その頃はすっかり「ICU人」となっておられ、行政学研究科の将来をことのほか案じておられた。黒縁の眼鏡の奥から、窺うように見つめられたりすると、思わずギクリとしてしまう。「手を貸してくれよ」という口調は何気ない様子であるのに、

チラッと投げかける視線が真剣であった。

学長に就任された後、一橋大学での行政学の講義などを引き継ぐことになったが、その頃から、直接お目にかかることがめっきり少なくなってしまった。電話では、「そのうちにゆっくりね」と繰り返されていたけれども、ついにその時がこなかった。あるいは、私のほうに原因があったのかもしれない。無念な思いがよぎる最後の数年である。

(中央大学教授)

渡辺先生と国際会議

鈴木 絲子

久し振りに寒かった長い冬が終わりイースター明けの今、ハドソン川の氷もやっと溶け、春一番のクロッカスが芝生に咲き出している。明日、4月3日からは夏時間になる。渡辺先生はニューヨークがお好きであった。近年は学長の要職にありながら、近いうちにサバティカル（研究休暇）をとって、ハドソン川の見える郊外の家でゆっくりしたい、と口癖のように言っておられた。教職、学長事務、講演、執筆とご多忙な先生は、早春の日溜まりにお好きな絵筆をとり、本に飽きたら近くの湖や林を散策できる、そんなゆったりとしたニューヨーク郊外の時間を夢見ておられたのだろうか。

この3月は先生の愛弟子の一人、明治学院大学の鍛冶智也氏とニューヨークで仕事をする事となり、また、中旬にはブリュッセルの国際行政学会(IIAS)の本部で先生と交友のあったガイ・ブライバント(Guy Braibant)氏にお会いし、先生の事を懐かしく語る機会を持った。

私は先生の授業を一度も取った事がなかったのだが、シンガポール大学留学から帰った1968年秋に修士論文の指導教授を、コロンビア大学研究員の

お仕事を終えて帰国されたばかりの先生にお願いしたという経緯がある。遡って先生とは、1964年に私が新聞社にいた頃、現在、静岡県立大学教授で、当時ICU行政大学院にお勤めの田中恭子氏と京都の天津へ旅行した際、先生が当時、大津市市政顧問をされていた折から書いて下さった紹介状が大変効いて、運転手付きの車で一日中、六甲琵琶湖めぐりが楽しめたというご縁があった。

以来、1969年の国連就職、1979-1980年のNYUでの博士論文指導教授と、国連での仕事と、私の人生の大事な節々に、必ず先生のご指導を仰ぐ事となった。幸い先生はニューヨークがお好きであったので、何回かこちらでお会いする機会があり、同時に先生の数多いお弟子さん達と横の繋がりが出来たのも、大変幸せなことであった。

この稿では、先生の国連を中心とするご活躍に触れて御供養と変えさせて頂きたい。

1977年にニューヨークにいらした時、先生は初めて国連の私のオフィスに訪ねて来て下さった。その時、私が担当していた、Institution Building for Developmentの会議に、現総務庁事務次官の増島俊之氏に出席していただけるよう、渡辺先生に説得をお願いし、快諾を得て頂いた経緯がある。増島氏には、渡辺先生の弟子という事で、その後の国連関係の仕事では大変お世話になることになった。

国連の仕事の為に、先生ご自身に最初にニューヨークに来て頂いたのは、1979年12月の'Methodologies of Policy Analysis'の集団会議の折であった。

この時先生は'Economic Analysis for Policy Analysis and Development'についての論文を提出された。JICAにお勤めの沼田道正氏を同行され、当時、まだワープロの無い時代に、沼田氏には深夜にわたるレポート作りを手伝って頂いたことがある。70年代後半はまだ計画経済が健在で、組織分析や社会科学の手法が、政策分析あるいはそのプロセスに、どう生かされるべきかという議論が盛んであった。

この会議の初め、政策分析のフレームワークを設定する前に、先生はそも

そも行政学とは何ぞやという難題を投げ掛けたので、参加者はその議論に夢中になって、会議本題の進行が大部遅れたのを覚えている。この会議にはオックスフォード大学からネヴィル・ジョンソン (Nevil Johnson) 教授が見えていて、よくお二人で話をしていた。

この会議の前後には、先生は日本政府や東京都のお仕事でよくニューヨークにいらして、当時の都のニューヨーク代表の小川氏や、地方自治研究資料センターにお勤めだった現静岡県立大学の北大路信郷氏、また私の博士論文のために行政管理庁から土光臨調事務局にいらした堀江正弘氏等を紹介して頂いて、その後、この方々には国連の仕事でも大変御世話になることになった。

79年の会議を契機に、先生に国連の色々なワークショップに来ていただくとしたのだが、私の所属する United Nations Programme in Public Administration and Finance は主に開発途上国向けで、どうも先生は途上国には興味を示さず、一つも実らなかった。途上国の方は、日本の発展過程に大いに興味があるのだが、先生だけでなく一般的に日本人を途上国に送り込むのは並み大抵の事ではない。

先生を次に国連に連れ出せたのは、1984年10月のジュネーブでの第7回国連行財政プログラム専門委員会であった。同委員会は、国連人口委員会や統計委員会のように、国連経済社会理事会に報告書が提出され、その決議に基づいて2年間の予算が認められる、という政府間会議に近い性格を持つ。五大国をはじめ、経済社会発展に重要に関係する国の政府、又はその国の代表的行政学者が出席している。先生の後には、当時の行管庁から増島氏に来て頂いて以来、総務庁から適当な方をこの委員会に送って頂いている。

このジュネーブでの会議は、当時、フランスの Conseil d'Etat で元 IAS 事務局長のガイ・ブライバント (Guy Braibant) 氏が副議長となり、先生が出張なさって人事行政システム強化、市民参加、アクセスの問題等、ブライバント氏と共通する関心課題が報告書に盛り込まれ、ブライバント氏も先月お会いした際、懐かしそうにそのことを思い出しておられた。この時も JICA

の沼田氏を同行してのお越しであった。

先生の国際的な活躍に関しては、IIASでの事を触れるべきであろう。私の知る限りでは、先生は80年代半ばからIIASの副会長をしていらしたので、1986年のヨルダンの首都、アンマンでの会議には当然おいでになるはず、と楽しみに出掛けていったのだが、この会議にも、そして次のマラケシュでの会議にも先生はお出ではなかった。当時IIASではアラブ勢力が台頭し、どうしてもアラブの国々に於いての会議開催であったため、ヨーロッパやニューヨークがお好きであった先生には気が進まなかったのであろうか。これは、非常に残念なことであった。

90年に入ってから、国連と東京都との共同会議プロジェクトで、何回か私も日本に行ったのだが、この件では、先生に一方ならぬお骨折りをいただいた。上司と日本に乗り込んでの最初の交渉は、非常に困難を伴ったが、先生が幅広い人脈を動員してキャンペーンをして下さったことで、それもかなり軽減された。まず、先生の弟子という事で、当時の増島審議官は、総務庁の事務次官の山本貞雄氏に引き合わせて下さり、事務次官会議でお隣という自治省の津田事務次官に話を通して頂いたことは、後で大変役に立った。

増島氏はまた、当時JICAの理事の数原大使や、自治省の幹部の方にも連絡を取って下さり、後には行政管理研究センターを通じてこの会議の専門委員として栗原茂明氏になって頂いた他、前理事長であり現在慶応大学教授の佐々木晴夫氏もこの会議に出席して下さい。先生はまた、都庁内では、当時、知事企画審議室におられた庄司忠史氏に頼んで下さり、都庁内部での物事の進行状況が分かって大変助かった。先生の御友人では、東京フロンティアの事務総長の野村 鋌 市氏や、東京市政調査会理事の東郷尚武氏をご紹介下さり、この方々には会議の組織委員会や専門委員会で大いにお世話になった。

日本での都市経営問題の会議には、学会のカウンターパートとして日本行政学会をもってくるように、と先生に勧められ、日本の学会に不案内の私に、連絡の取り方やご挨拶の手順まで手取り足取り教えて頂き、これに関し

ては、先生の筆頭弟子の今村都南雄中央大学教授が、私により、悩まされるはめとなった。お蔭様で、行政学会からは重鎮の西尾勝教授と大森彌教授が、それぞれ、全体会議のモデレーターと全体報告者となって頂いたのを始め、中邨章明治大学教授が専門委員として会議の中身についてご指導下さったほか、学会を動員して多数の学者の出席を得ることが出来た。

先生には、この1993年4月、東京で開催の世界会議の名称と、取り上げるべき主題についてもご指導を受けた。英語名ではMetropolitan Governanceだが、90年には未だgovernanceという言葉には抵抗があったし、先生は広範囲に、政府のみならず民間をも含む大都市経営（Metropolitan Management）を主張なさった。今村、中邨両先生とも相談し、更に西尾勝教授がこの会議で'governance'という言葉を行き回らせて帰ってもらったかどうか、ということも仰り、紆余曲折を経た後、会議の名称はMetropolitan Governanceとすることになった。日本語ではメトロポリタン・ガヴァナンスもメトロポリタン・マネージメント、何れも大都市経営であるが、94年現在でも、インドやアラブ諸国ではガヴァナンスを旧植民地経営、ひいては東インド会社経営を連想する言葉として嫌がる学者も多い。先生は、ガバメント（統治）という言葉の持つニュアンスから、この言葉は地方自治あるいは官民協力を扱う会議では避けた方が良いと思われたようだ。先生はもとより、地方行政がご専門であったのである。

もう一つ、貧困をこの大都市経営会議のテーマの一つにするとということでは、都側からは「東京には貧困は存在しないので、この言葉は馴染みにくいのではないか」と懸念されたことがあった。国連では、貧困は、世界の経済社会における大問題として、この会議でも当然取り上げられるべきテーマであった。この話を先生に持ってゆくと、先生は、「東京に貧困は立派に存在している、都会の中の過疎化、高齢者対策等があるではないか。」と非常に熱心に主張された。例えば、ニューヨークの貧困は誰の目にも顕著である。この会議の準備を始めた頃は、東京は世界にも稀な、平和で豊かな街であった。それが、急速に国際化が進み、経済も複雑に低迷している東京の幾つか

の主要駅では、現在、ホームレスの人々の姿が、旅行者の目に痛ましく映る。結局、この会議では社会サービスとしてこのテーマを取り上げたのだが、今後、貧困は東京でも問題となるであろう。

この会議の準備の途中で先生がお亡くなりになって、大変心細かった。思えば先生は、行政研究の要所要所にご自分の弟子を送っていらしたので、ICUのように新しい大学でも先生のお蔭でネットワークが出来ていたようだ。その中心を突然失って呆然とした人も少なくないのではあるまいか。欲を言えば、もっと長生きして頂かかった。先生には、去年の四月、東京で大成功をおさめた国連東京都主催の、大都市経営世界会議も見に来て頂かかったし、いつも口にされていたニューヨーク郊外の春を訪れて頂きたかったと心から思う。

合掌

Tarrytown, N.Y. にて

(国連本部開発行財政プログラム上級行政管理官)

弱いときこそ強い

北 村 純

渡辺保男先生のご講義「行政学」を拝聴したのは、大学3年のときである。1980年秋学期。その頃からすでに先生は大変ご多忙で、講義が沼田道正先生(国際協力事業団)の代講になることも少なくなかった。

その後、教養学部卒論から大学院を通してご指導を賜わるようになった。ICUでは日常のなかで先生と学生がごく親密に接する。しかし、先生と私の師弟関係は、一方で先生のご多忙、他方で私の遠慮と引きこもりが重なって、どちらかという寂しいものであったかも知れない。私は積極的に先生に近づいて自分をアピールする学生ではなかった。お会いしたときの先

生の印象は「あっ、この人は善い人だ」という何の根拠もない素朴なものである。私の直観では、渡辺先生が長清子先生や辻清明先生や田中守先生と同じ位「善い人」になってしまったのである。まさか数年後学長に選出される方だとは夢にも思わなかった。

先生が旧制府立四中の御出身であることに気づいたのは、卒論の登録をしてからだった。私は四中の後身の都立戸山高校の卒業生であるから、先生は学校の先輩ということになる。先生が戦前の四中時代に習った英語の先生に、私も1974年の戸山高校で英文法を教わっている（だから英語が下手なのか？）。昔のナンバー・スクールには新制高校となっても同じ学校で教え続けた古参の先生方がたくさんおられ、卒業生は思わぬところで「戦前・戦後連続論」を体験する。このあたりのことは、私より10年先輩の林望『帰らぬ日遠い昔』（講談社）を読むとよくわかる。

先生の四中評は「あそこは詰め込み教育だから……。君も大変だったろう」という言に尽くされている。私も「はい、大変でした」と短く答え、なぜかお互いに話題を変えてしまったが、四中・戸山について先生と話したのは後にも先にもこのとき一回だけだった。

大学院時代。先生は私の家庭や内面の問題にも気づかわれるようになった。私が父のようなエリート・コースを歩めないと社会に出る前に自信喪失していること。しかし、心の危機を体験しながら、研究の世界で何とか自立したいと努力していること。そして、なかなか父に理解してもらえないこと、などなど。

「君は結局、おぼっちゃまなんだ。ICUの育ちのいい良家の子女のひとりだよ。お父さんもいまは大きな責任を背負って苦勞しておられるのではないかな。君は勉強してだんだん（研究者として）自信をつけていけばいいさ」――渡辺先生は切ない自我のためにもがき苦しむ私をあわれんでくださったのであろう。半ばからかうように、慰めるように、ユーモラスに、私を励ます側に回ってくださった。同時に、厳しいご指導も、また膝がガクガクするようなご叱責も容赦なくいただいた。先生は何度も私のために祈ってくださっ

たのではなからうか。

学長になられた頃からだろうか、しだいに私は先生が信仰によってご自分の「弱さ」を生きておられる方だ、とを感じるようになった。学長室で先生にお会いするたびに、私は先生のなかに「弱いときにこそ強い」という言葉を思い浮かべていたので、ご葬儀のときの聖書朗読の1つに「コリント第2、第12章8～10節」が選ばれていたことにひどく驚いた。

不肖の弟子であると私は先生のご逝去に涙を流す資格がないかもしれない。しかし、先生のご指導に深い感謝の念を持ち続けることは許されるだろう。

(東京市政調査会研究員)

ハドソン河畔をドライブした頃

渡 辺 純 子

早いもので、保男が他界致しましてから、丸2年になろうとして居ります。この度皆様が追悼号をお出し下さいますに当たり、私にも紙面をおさき頂きましたので、思い出の一端を認めます。

今この文を、アメリカのノースカロライナ州に住んで居る娘一家の所で書いておりますが、丁度私共一家が二十数年前にニューヨークに着き、とまどいながら外国生活を始めた時と同じような秋の季節です。留学生活でしたので、経済的には余裕がなく、言葉も不自由でしたが、今になりますと、忘れ難い日々で、あの一年十ヵ月、異国で過ごした時が私共一家の一番屈託なく過ごせた時ではなかったかと思えます。

ニューヨークでの最初の一年は郊外の小さな家の2階を借りて過ごしました。階下に住んでいた家主一家のおじいさんは、ロシア革命の時にアメリカ

に亡命して来たという人でした。当時五才の娘をととても可愛がってくれました。その家から、保男は地下鉄でマンハッタンのコロンビア大学に通い、近所には適当に留学生や駐在員の御家族がいらっしや、私共もその方達とお付き合いさせて頂きました。

二年目はマンハッタンの大学のすぐ裏のアパートに移り、保男は通いやすくなり、娘もハドソン川の近くの教会の幼稚園に通いました。アメリカの生活や気候に慣れてきたのもこの頃と覚えています。春になって夏時間になると、夕食が終わった後もまだ明るく、やっと手に入れた中古のフォルクスワーゲンで、親子三人ハドソン川のほとりをずっと上流迄ドライブを楽しみました。丁度新緑の季節で、アメリカ特有のゆったりした自然の景色は美しいものでした。又、夏休みには娘をサマーキャンプに出し、久しぶりに二人でニューイングランドに旅行をし、ハーバード大学やメイフラワー号の記念の所等を見物して廻った事等を思い出します。当時は1ドル360円でしたし、アメリカは最も繁栄の時ではなかったかと思えます。戦中派の私共は、かつて戦いを交えた国に留学生として暮らし、日本にただけでは出会えなかったような種々な方と交わり、日常の生活の中から価値観や物の見方に変化のあった貴重な日々でした。今ノースカロライナ州立大学で客員研究員として滞在している婿や娘、そして去年の秋に保男と入れかわりのように生まれました孫と一緒に過ごして居ますと、娘一家は私共よりはるかにアメリカに馴染み、その生活を楽しんでいるような気が致します。そして婿と孫が二人で遊んでいる所を見るともなく眺めていますと、二十余年前の保男と娘の姿が重なり合って、過ぎた日々が懐かしく思われます。

日本に帰りまして基督教大学の中に住まわせて頂いて間もなく、あの学校紛争の嵐が吹きあれました。紛争が治まりました後暫くして、思いがけなく学長に就任致しました。最後の年は病気がちでしたが多くの方の御支援を頂きながらなんとか務めさせて頂きました事を思い出すと、万斛の感があります。保男は、昔流に育った男がそうであったように、仕事の事は一切家庭では話しませんでした、アメリカでの生活が、後の保男の仕事に随分役に

立ったのではないかとと思っています。

考え出しますと思ひ出はつきませんが、ほんの思ひつくままに、楽しみも苦勞も多かったアメリカでの生活の事を書かせて頂きました。

終わりに、この紙面を拝借し、拙文をお載せ下さいました事と、保男が生前お世話になりました方々に心から御礼申し上げます。

(故 渡辺学長 夫人)